

〔巻頭言〕

## 家族看護学の発展を望んで

三重県立看護大学

前原 澄子

看護職者たちは、以前より病院において病に悩む患者さんを看護した時、在宅療養の方を訪問看護した時、あるいは新しい家族員の誕生を迎える妊産婦を看護した時、いつも患者さんのみでなく家族の方々へも目を向けていたと思われる。しかしその見方は、対象となる個人を援助する人的環境のひとつとしてのみの見方であった。健康問題を持ち生活上それが医療施設であれ、在宅であれ看護の援助を受けなければならない家族員が出た時、その家族の反応は大きく、その反応の家族間の力動関係は、家族員それぞれの健康にも影響を与えることに気づいてきた。そこに、ダイナミックな組織体としての家族を対象とした、看護のあり方を追求しなければならない必然性が生まれたのである。それに加え現代の家族は、形態も機能も伝統的な家族ばかりでなく、ますます多様化していく傾向にある。家族看護を実践していくには、家族看護学の体系化が急がれると気づき、

わが国でその研究体制が整備され始めてから、そう年月は経っていない。筆者が初めて経験した家族看護学の研究体制は、千葉大学看護学部の家族看護学講座であった。1992年に千葉銀行から寄付講座設置の意向が示された時、教授会でその講座内容を慎重に審議し「家族看護学講座」と決定し受け入れられたことに始まる。また時を同じくして、東京大学大学院に家族看護学講座が誕生し、これ以後、家族看護学に関する研究・著書・シンポジウム・実践が活発になり、日本家族看護学会が1994年に誕生した。

このように見ていくと、いかに研究環境を整えて行くことが、その分野の学問を発達させるのに重要かが理解できる。今後、家族看護学の発展に本学会、そして本誌の果たす役割が大きいことを学会員一人一人が認識し、発展に向けての活動が望まれる。日本学術会議の登録団体として、恥じることのない学会誌に発展することを期待する。